

# 海外研修報告書

研修期間：2010年3月9日～6月4日

絵画科日本画専攻 武田州左

研修地：アメリカ N.Y. ワシントン D.C.

N.Y. のど真ん中。タイムズスクエアから歩いて5分と掛からない場所に住むことになろうとは、夢にも思っていなかった。不動産屋の手違いで、帰国間近の三週間、64丁目から引っ越し、50丁目、8番街の角に建つ高級アパートで生活する事になった。至近距離にミュージカル劇場が幾つも建つ場所柄、15階の窓から見下ろす目の前の通りは、一日中観光客が溢れ返っている。真夜中を過ぎても街の喧噪が二重サッシを通過し、部屋の中にまで飛び込んでくる。マンハッタンにいるという事を、この時ばかりはいやという程強く実感させられた。

その感覚に呼び覚まされる様に、幾つもの記憶の糸が、たぐり寄せられた。

1979年8月。初めてN.Y. マンハッタンを訪ねたときの映像が、昨日の事の様に見えて来た…。

街には浮浪者が溢れ、捨てられたゴミで道は汚れ悪臭が

漂い、行き交う人々の表情に、どこか険しい眼差しを感じた。想い描いていた大都会のイメージからは程遠い、荒廃した都市を目の当たりにした十代の自分は、そこで言葉に出来ない程の強い衝撃を受けた…。

それから20年経った1999年～2000年に架けて、同じN.Y. マンハッタンで約一年間を過ごしている。この時の滞在は、家族を伴っていた事もあり、生活全般でより深く街と拘る事となった。そこで目にしたのは、前回の記憶を根底から打ち消す、明るく軽快に振る舞う人々の姿であった。ストリートを歩けば笑顔の挨拶が返ってくる。ダウンタウンの裏通りも、見違える程お洒落に甦っていた。渦巻くカオスとは裏腹に、繰り出す人並みを眺めているだけで、自然と陽気になれる、そんな空気がそこここに充満していた…。

そして今回、2010年3月から三ヶ月に渡り、再びこの地を訪ねる機会を得た。

街は、以前にも増して活気づいているのに驚かされた。気のせいか、行き交う人の数も、人種の数も増えた様に思う。その一方で、依然強烈なカオスが渦巻いているのを感じる。

十年前に家族で訪ね、記憶も鮮明なワールドトレードセンター (WTC)。ロウアーマンハッタンのランドマークとして聳え、N.Y. の象徴でもあったツインタワーが、忽然と姿を消していた様は、やはり衝撃的であった。

グランドゼロと呼ばれる跡地では、既に新しいビルディングの建設が着々と進められ、何事も無かった様に、大勢のビジネスマンが工事用フェンスの周りを行き交っていた。

混沌の渦と、歓喜の声が同時に沸き起こる街。その何処に、世界中の人々を引き付ける魅力が隠されているのだろうか。

十年振りのマンハッタン生活を振り返りつつ、探してみたい。

3月9日午前10時過ぎ、成田からの直行便 UA9671 (ANAのシェア便) は定刻通り、雲一つない快晴の N. Y. JFK 空港に到着した。

入国審査を経て、空港からタクシーに乗り、予めインターネットを通して契約を済ましてある、64丁目、WESTEND AVE. のアパートに直行した。以前暮らしたイースト側を避け、今回はあえて未だ馴染みの薄いウエスト側にしばって住む場所を探す事にした。

…真夜中に、現地不動産屋と FAX でやり取りしながら部屋探しをした十年前の事を思うと、隔世の感を禁じ得ない。時差を気にする事無くネット上で豊富な物件をあたり、メールを通して地球の裏側といつでも連絡を取り合う事が出来る。部屋の間取り、窓の向き等も、日本にいる時点で

確認が出来ていた。

正午過ぎ、家族共々 6 4ST 側アパート入り口に到着した。  
…建物の外観、立地共に、グーグルアースのストリートビューで確認した通り、同じだ…、と妙な感慨にふける。

ここで初対面になる、現地不動産の女性スタッフに案内され、山の様な荷物を 1 1 階のフロアに運び入れる。  
エレベーターホールから更に長い廊下を移動、目指す部屋番号 1 1AA のドアの前に立った。

二重ロックを解錠し、いかにもアメリカらしい重たい鋼鉄製のドアを押し開けた途端、眩しい程の光に包まれた。  
床面から天井まで開かれた広い窓ガラスから、正午の日差しが、降り注ぐ様に差し込んでいるのがわかる。

とにかく明るい。この瞬間、快適に過ごせる部屋である事が確認出来た。

マンハッタンで日当りの良い部屋を見つけるのは非常

に難しい。たとえ南向きであっても、目の前の視界を隣の高層アパートが壁の様に遮っていることがある。太陽の光を求めるのであれば、摩天楼が密集するマンハッタン特有の住宅事情を、よく考慮しなくてはいけない。

ウエストエンドアベニューに面したこの窓からは、日の出の太陽の位置も確認する事が出来た。朝陽に照らされ銀色に浮かび上がるパークウエストの街並を、この後何度と無く眺める事となる。

碁盤の目に整然と区画整理されたマンハッタンは、そこに暮らす者だけではなく、初めて訪れる旅行者にとっても歩き易く、街の成り立ちがつかみ易い。地図を俯瞰するだけで、およそその場所のライフスタイルをイメージする事が出来る。同時に、僅か数ブロックの違いで、街の表情がガラッと変わること気が付かされる。

狭い範囲の中で起こる、劇的な変化。それが、この街を

特徴付ける最大の要因かもしれない。

例えば前回住んだアッパーイーストは、ドイツ系の小売店が多く、堅実な雰囲気漂っていた。イーストリバー沿い徒歩圏内には、ヨーロッパを思わせる美しい公園があり、幼い子供連れにとっては生活し易い場所であった。その数ブロック北に、治安が心配なハーレムが広がっている。

一方、今回住む事にしたウエストの64丁目周辺は、学校が多く、クラシック音楽・オペラ・バレエの殿堂、リンカーンセンターを中心に、文化の香り高い落ち着いた街並を形成していた。ここから、徒歩で10分ほど南下した50丁目以南に、ミュージカル劇場が集中する歓楽街、タイムズスクエアが控えている。

変化に富む街のありようは、そのまま多様な価値観が併存していることを意味する。N.Y.は居ながらにして、全世



界に出逢える場所ではないか。最高級の選択肢が、全て揃っていると言える。

街を特徴づける要素に、個性的な建物、ランドマークの存在がある。マンハッタンは、とりわけそれが豊富であった。

世界に冠たるメトロポリタン美術館、フリックコレクション、アメリカ自然史博物館、ジョンレノンが住んで観光名所にもなっている、ダコタアパート。その何れもが64丁目のアパートから徒歩圏内に点在していた。

網の目の様に張り巡らされた地下鉄、バスを乗り継ぐ事で、そうしたチェックポイントに、いとも簡単に出掛けることが出来る。この場所が世界中の人々を引き寄せる大きな理由に、観光ポイントが豊富なこと、それらを繋ぐ交通の利便性が非常に高いことが挙げられると思う。

東京二十三区にも満たない面積に、何故これほど迄全世界のコトとモノが集まっているのか。特異稀な場所の成立を考えてみた。

アメリカは誰もが知る、移民の国である。

N. Y. に最初に入植したオランダ人が、1626年、先住インディアン、アルゴンキン族から破格の安値、60ギルダーでマンハッタン島を買い取った話はあまりにも有名だ。

その後、イギリスにより奪取、地名をニューヨークと改め、更に独立戦争に敗れたイギリスが1781年10月に撤退、マンハッタンは解放され、1787年のアメリカ合衆国成立へと時代は繋がっていく。

合衆国成立後、世界中からあらゆる人種が夢と希望を抱き、この国を目指したのは周知の事実で、移民の急増に合わせて、経済、文化は益々栄え、ニューヨークはアメリカ最大の都市として、着実に発展した。

その何れにも寄与したのが、カーネギー、モーガン、ロックフェラーら、アメリカの勃興期を代表する大富豪達である。

ヨーロッパに受け継がれている精神に、社会的に成功を納めた者が、文化事業の支援を通して、社会に還元する伝統がある。そうした考えが後押ししたであろう、時代の潮目で巨万の富を手にした彼らは、こぞって、芸術文化に投資した。

アメリカ最大の都市N.Y.に富が集中する中で、自ずと第一級のコレクション群がマンハッタンに姿を現したのも、自然な流れであったに違いない。

36丁目マディソンアヴェニューのモーガンライブラリー&ミュージアムが、57丁目7番街の音楽の殿堂カーネギーホールが、その精神を今に伝えている。メトロポリタン美術館はじめアメリカの多くの美術館には、ロックフ

エラーの名を冠した第一級のコレクション群が、多数収蔵されている。

更に、この場所がそれら人類の財産を受け入れる適地になった理由が、他にもあった。

自然条件に恵まれていた点が挙げられる。アメリカ東部のこの辺りには地震が起きない。その上マンハッタンは、それ自体が強固な要塞に例えられるように、島全体が二万年前の非常に硬い岩盤でできている。高層建築を建てる上で、申し分の無い条件がもともと整っていた。

夜間飛行で上空から眺めるマンハッタンは、島の形に摩天楼が浮かび上がり、ひととき美しく輝いて見える。

巨万の富と、二万年前の岩盤が偶然にも出逢った歴史の幸運が、そこにはあった。

セントラルパークを歩くと、至る所に太古の岩床が露出

しているのを見る事が出来る。コロンバスサークルに近い、小山程もある岩盤は、アンパイヤー砦という固有名詞まで付いている。頂きに立つと、一気に視界が開け、ミッドタウンの街並を、公園の木立の向こう側に眺める事が出来る。新緑の頃はその対比が特に美しく、公園に出掛ける度に、幾度と無くそこからの景色を楽しむことが出来た。大都会の中心とは思えないゆったりした時間が、そこに流れていた。

滞在するたびに気付く、日本とは違う、この街に流れる時間の感覚…。

その辺りについて、記しておきたい。

マンハッタンは大都会でありながら、時間がゆっくり、あるいは止まって感じられる場面によく出会う。

郵便局では、大人達が一列に並び、呼ばれるまで黙って順番を待っている。局員達の仕事ぶりは驚く程ゆっくりで、

それにも拘らず、誰一人文句を言う訳でもない。

スーパーのレジでも同じ。店員同士が雑談にふけり、片手間にレジスターに向かい商品のバーコードを打ち込んでいる様にしか見えない時がある。後ろに客が何人並んで待っていても、まるで構う様子など無い。

しかしここでも、待たされている側から文句を言う人はいない。

何れも、日本人にとって目を疑う場面ではなかろうか。

ところが不思議なことに、滞在一週間が過ぎる頃から、そうした光景が普通に思えてきた。それどころか、それまで当たり前に思っていた、日本での機械的な流れの方が、むしろおかしいとすら感じる様になってくる。

待つ事で、人間本来の感覚が目覚めて来るようなのだ。この街に暮らす人々の明るい表情は、どうやら、些細なことは気にしない、何事に対しても悠々と構える生活哲学に由来しているように思う。

確かに、客の立場に立ち、極力待ち時間をなくす努力に対し、異を唱える人はいないと思う。またそれを極める事が、日本的心配りだともいえる。

例えば、戦時中でも、日本の鉄道は時刻表通り運行されていたと聞く。現在の新幹線に至っては、秒単位で正確なダイヤを保っている。しかし、ひとたびリズムが狂った途端、余裕が無い為、アソビが無い為に、そこから連鎖的に広がる影響は、あまりにも大きすぎるのではないか。

今の日本は便利さを極める一方で、日常生活の隅々まで、いつの間にか時間に縛られている事に気づかされる。閉塞感が漂う昨今の日本社会が硬直する原因に、そうした事が繋がっているのではないか…。

片や待つ事が当たり前な社会。片や、待たなくてもいい、待つ事を忘れた社会。

自分達一人一人の生き方が、そこで問われている。

新緑が芽吹く時期に合わせてるように、マンハッタンの上空は、雲一つなく晴れ渡る日が多くなった。とりわけ、セントラルパーク、シープメドウの芝生に寝転び見上げた青空は、遠くどこまでも澄み渡っていた。自分だけではない。平日の昼間だというのに、大人達が男も女もあちらこちらに寝転び、日光浴を始めている。いったいこの人たちは、いつ働いているのだろう、と余計な心配が頭をよぎる。が、次の瞬間、その発想自体、日本的だったと気づかされる。

彼らにとって、今この時間、シープメドウに寝転ぶことが最優先事項に他ならない。澄み渡る青空の元でのんびり気持ちよく過ごしたい。素朴な感情が、素直に現れている。

滞在中、長く N. Y. に住む日本人から聞かされた言葉を思い出した。

『…日本と決定的な違いがあって、こちらの人、先ず人



生は楽しむものと考えている。日本人の勤勉もいいけれど、自分にとって一番大切なことを忘れてはいけない…。』

一日24時間。その中でどう過ごすべきなのか。ここでもまた、生き方が問われているような気がした。

今日もまた、世界中から人々が集まって来る。

昼も夜も絶え間無く、マンハッタンは、世界の言語が飛び交っている。この瞬間もタイムズスクエアは人で溢れ、話題のミュージカル劇場の前では、チケットを求める長蛇の列が出来ている事だろう。肌の色は関係ない。男も女も、大人も子供も、若者も老人も、健常者も車いすに乗った身障者も、誰もが等しく、心底楽しんでいる姿がそこにはあった。世界の頂点を極めたオペラ歌手の歌声に、惜しみない拍手をいつまでも送り続ける聴衆の姿がそこにはあった。感動という共通言語で、世界中の人達がこころひとつになれる類い稀な空間。そうした現場に幾度と無く立ち会

う中で、この街の持つ計り知れない底力を、思い知らされたような気がする。

蓄積が違う。聴衆を含め、受け皿のレベルが違う。あらゆる分野のトップ集団が、常に街のどこかでしのぎを削っている。

それゆえ夢を追い求める人々は、言葉や習慣の壁を乗り越え、今日もN.Y.を目指し世界中から集まってくる。

帰国間際、マンハッタンを僅かに離れるチャンスを得た。それは、都会の喧噪から遠ざかる、絶好の機会でもあった。

ハドソン川沿いに北上するメトロノース、ハドソンラインの車窓からの眺めは、始発駅グランドセントラルを出て30分もしない頃から、雄大な自然渓谷の懷に包まれる。

ニュージャージー州に繋がるハイウェイは、ハドソン川に掛かる橋を渡った途端、深い森の中をどこまでも駆け抜けて行く。

ナビスコの工場跡に造られた、現代美術の巨大展示場デ  
ィア・ビーコンは、そんな緑豊かな街のひとつ、ビーコン  
市の楓の森にとけ込む様にして建っていた。

巨大な野外彫刻を、大地の起伏そのままに生かした自然  
公園でみせる、ストームキング・アートセンターは、緑の  
山並みが見渡す限り続く、マウンテンビラの深い森の中に  
広がっていた。

都会から、僅か数マイル移動するだけで姿を現す、桁違  
いに大きいアメリカの自然。

ここでもまた、際立った違いを発見する事になる。

外国に身を置き、その空気を吸うだけで、誰もが少なか  
らず刺激を受けるに違いない。三ヶ月に渡る異国での生活。  
それは想像以上、期待以上に内容の濃いものであった。

住み慣れた街に帰り、元の生活に戻った今でも、そこで  
の記憶は色褪せる事は無い。中でも特に忘れがたい出逢い

の数々。今回も、人との出逢いが一番の収穫であった。

母国を長く離れ制作に励む日本人アーティスト達は、誰もが皆、意志の強い眼差しで語りかけて来た。長年現地企業のデザイナーだったという日本人女性は、年齢を感じさせない明るい表情で、心置きなく暮らせる N.Y. ライフの素晴らしさを語って下さった。あるパーティで知り合った元金融マンという日本人男性は、英語以外、フランス語も流暢に話し、これから立ち上げようとしているビジネスについて滔々と説明してくれた。写楽と国芳は自分の兄弟だとはぼけて話す、元ロックンローラーだったというフランス系アメリカ人のアーティストは、KUNISA という名前を一度で覚え、別れ際まで何度も親しげに呼びかけてくれた。ワシントンでは、たまたま通りで出逢った、ハーバード大出のミステリー作家の女性と、その後半日に渡りスミソニアン  
のギャラリーを巡ったりもした。

他にも、卒業旅行で始めてN.Y.に来たという、東大大学院の学生と食事をしたり、東京芸大の声楽を卒業、一度は高校の音楽の専任教員になりながら、夢が捨てられず、再びオペラ歌手を目指し、個人レッスンを受けに短期留学している女性と知り合いになったりと、思いがけない出逢いの数は、ささやかなものまで含めると、枚挙に暇が無い。なにより、そのどの人達も大変前向きで、生き生きと輝いて見えた事が強く印象に残っている。一つ一つの出逢いを通し、自身を取り巻く世界が、幾重にも、明るく広がって行くのを実感した。

今こうして文章に起こしながらも、出来事のすべてが鮮明な映像として甦って来る。

そして、我に返り、目の前の窓の外の景色に視線を移す。見慣れた筈の風景が、心のありようで、急に新鮮に見えて来るような気がした。

今回の経験が、意識の水面下では既に動き始めているの  
らうか。今後、時間をかけ、自分の仕事に繋げて行けたら  
と思っている。

今一度、足もとを見つめ直す事から始めたい。新たに沸  
き起る、熱い想いを待ちながら…。

己の内に閃く、美の光源。それを今後とも探って行きたい。